

Fate/Apocrypha×仮面ライダーオーズ

日野映司の物語

バーラ18

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

数多の聖杯戦争の中で、これは外典に位置する。

これはサーヴァントの物語ではない、これはマスターの物語でもない。

これはヒトが願いを叶える物語である。

そして——たつた1人の人間の戦いを書いた物語もある、

目次

プロローグ	1
出発と怒りと決意	6
記憶と嵐の前の静けさと旅立ち	9
始まりと怪物と対立	12
英靈と怪物と攻防	16
中断と謎と正体	18
警戒と紛争と村	21
想定外と森林と狂戦士	25
ピンチと切り札と重力コンボ	28
2戦目と2騎と2回目	30
大英雄と瞬足と最強コンボ	34
誓いと地獄と覚醒	37
奇跡と情けと涙	42
母と介抱と温もり	44
驚愕と別れとシギシヨアラ	48
剣士と怪物と力の謎	52

プロローグ

それは到底戦いと呼べるものではなかつた。数は5対1、それは一方的な虐殺であつた。

「ぐああああ！」

拳で靈核を皮鎧ごと貫かれた槍兵は断末魔をあげながら地面に崩れ落ちた。

闇夜の森の中で繰り広げられた戦い。

今それが終わりを迎えるとしていた。

「ばかな！5対1だぞ！なぜこつちが追い詰められているんだ！」

全身に中世風の騎士甲冑を纏つた剣士はそう叫ばずにはいられなかつた。

しかし悲しいかな、その問いに答えてくれる者はもうこの世にはいない。

正真正銘、剣士は5騎いた英靈の最後の一人となつてしまつた。

ふと月の光が闇を裂き、剣士の周りを照す。

そこにはついさつきまで仲間だつたモノが散乱していた。

みずから魂とも言える弓を傍らに残し、上半身をどこかへなくした弓兵。

愛用の槍を無残にも2つ折られ、心臓を穿たれた槍兵。

木の枝に吊るされ、身体を袈裟切りにされた魔術師。

黒いローブでしか判別することができないほど滅多打ちにされた暗殺者。

これぞまさしく死屍累々だつた。

最後に残つた最優を誇る剣士も鎧があちこちへこんでおり、愛用の剣は酷く刃こぼれ、いまにも折れそうであつた。

彼らの名譽のために言つておくと、集まつたこの5騎は決して弱いわけではない。

各騎それなりの功績を修め、幾多の修羅場を巡つた英雄である。ただ相性が悪すぎた、それだけのことだったのだ。

「くそお！なぜ攻撃が効かない！お前は一体何なんだあ！」

剣士は目の前にいる怪物に問わずにはいられなかつた。

なぜコイツは英靈を圧倒するほどの力を誇るのか、なぜコイツは我々を狩ろうとするのか。

そしてなぜ我々の切り札が通じないのか。

だが、怪物は何も答えない。

ただ剣士に向かつて緑色の複眼を妖しげに光らすだけだつた。

「じゃ、確かに引き受けたぜ」

仕事の依頼を受け、前金替わりに受け取つた子ヒュドラのホルマリン漬けを抱えたフリー・ランスの魔術師、獅子劫界離は悠々と部屋を後にしようとした。

しかし

「待て、最後にもう一つ用事がある」

獅子劫を呼び戻したのは仕事の依頼主である時計塔、召喚科学部長ロッコ・ベルフエバンだつた。

「なんだよ爺さん、まさか他に注意事項を伝え忘れたわけじゃないだろうな？」

獅子劫は訝しげな顔をした。

「なあに、これは依頼とは関係ないことだ、少しお主の意見を聞きたいことがあるっての」

ベルフエバンはヒョヒョヒョヒョと笑つて獅子劫にソファーに座りなおしてもらいうように促した。

「で、なんなんだよ、俺に意見を聞きたい事つてのは」「これじやよ」

彼は机の引き出しから数枚の書類を取り出し、魔術を使って獅子劫の手に誘導した。

「なんだこれ？」

「まあ、読んでみるといい」

受け取った書類に獅子劫は目を通し始める。

始めはただ流すように眺めていたが、途中からバツと食い入るように読み始める、その額には一筋の冷汗が流れている。

「爺さん……これはデータラメな情報じやないよな？」

時計塔の情報網を彼は決して疑つてはいる。

だが、そこには獅子劫はもちろん、他の魔術師にとつても到底信じられない内容が綴られていた。

「ああ、すべてはその書類の通りだ」

ベルフエバンは渋い顔をして頷いた。

「だからって5騎のサーヴァントが何者かに全滅させられた、なんて信じられるかよ……」

獅子劫が納得できないのも無理はない。

基本原則、いや絶対に一般人はおろか魔術師でさえもサーヴァントには逆立ちしても太刀打ちできない、それが今の魔術師達の間での常識だ。

そう、この事件は世界の理から大きく逸脱した出来事だった。

「このような出来事は二年ほど前から起きておる、最もこの儂を含めて誰も信じようとはしなかつたがな。」

「念のため聞いて置くが他のサーヴァントの仕業じやないよな？」

ベルフエバンは首を振った

「残念だがその可能性は薄い、事後処理を行つた時に周囲にこびりついた魔力の残滓を計測したが、その亞種聖杯戦争に参加した魔術師とそのサーヴァント以外に反応はなかつた」

獅子劫は深く唸る、この事件がサーヴァントの手によるものなら大分わかりやすかつたのだが、と彼は思つたが現実にはそうはいかないみたいだ。

仮にサーヴァントも仕業だつたとしても5騎を同時に相手どれる力をもつ者はそうそういない。

ならばいつたい誰がこれを可能にするのか？

フリー・ランスで活動している獅子劫であつても全く思い浮かばなかつた。

「そういえばサーヴァントは全滅した言つてたがマスターの方はどうだつた？同じく皆殺しにされたのか？」

「いや、マスターは全員無事ではある、しかし全員重症だ、命に別状はないが魔術師としての再起は不可能だろう」

サーヴァントは殺して魔術師は生かす、犯人像を思い浮かべようとしたが謎は深まるばかりだつた。

「ダメだ、どんな奴かまるで見当がつかない、爺さん、他に分かることはないのか？例えればそいつがどんな武器を使つていたかとか」

武器が分かればもしかしたら心当たりがあるかも知れない、獅子劫はそこに望みを賭けた。

「手がかりになるかは分らんが、奴の付けた破壊痕はどれも人間離れしておつた、よほどの破壊力のある得物を使つっていたのかもしけんな」

「人間離れした破壊痕で……それだつたら魔獣……いや、サーヴァントを相手にできるのは神獣くらいなもんか……」

「まあ、考えても仕様がないことだ。問題は……」

「そいつは必ずこの聖杯戦争に参加してくる……と言いたいんだろ？爺さん」

獅子劫の答えにベルフエバンは頷く。

「うむ、今回の聖杯戦争は亞種聖杯戦争と比べて召喚される英雄はどちらも別格だ、やつが来たとしても問題なく鎮圧できるじゃろう、しかし油断はするな」

それは獅子劫も賛成だつた。

正体が何であれ、英靈をも屠る怪物である、用心するに越したこと
はないだろう。

「分かつてゐるさ、爺さん、何なら追加の報酬でそいつも倒してやる
ぜ」

「まあ、可能なら構わんが……あくまで仕事はこの聖杯戦争で勝利
することだ。それを忘れるな」

ベルフエバンは獅子劫にそう釘を刺した。

出発と怒りと決意

日本の東京に位置する鴻上ファウンデーションの本社ビル、その最上階の部屋で一人の男性が鼻歌を交えながら、とある作業に熱中していた。

派手な赤色の背広の上からエプロンを付け、左手にはボール、右手には泡だて器を握り、慣れた手つきで生地をかき混ぜている。

「会長、日野さんをお連れ致しました」

ノックとともに、一人の女性が入室する。

「里中君、入れてあげたまえ」

男がそう言うと女性は一礼してから扉の向こうへ消える。

少しの時間の後、今度は一人の青年が部屋に入ってきた。

「よく来てくれた日野君！」

「お久しぶりです、鴻上さん」

男は満面の笑みで青年を歓迎する。

それに応えるように、青年も、静かに笑顔を作る。

「日野君、アフリカでの亞種聖杯戦争が終わつた直後で申し訳ないが、早速ルーマニアに向かつてくれ」

元の厳めしい顔に戻つた鴻上は青年にそう告げた。

「ええ・・・分かつてますよ、そのために早く戻つてきましたから」

「ということは・・・今回の事情も理解しているようだ」

日野は少し顔を険しくして頷く。

「はい・・・ユグドミレニアによる魔術協会への宣戦布告。それに伴う時計塔とのかつてない規模の聖杯戦争がルーマニアで行われようとしていますね」

「それは違う日野君、これは単なる亞種聖杯戦争ではない、もはや大戦だ」

日野はさらに表情を険しくさせる

「分かっています。今回の聖杯大戦……多かれ少なかれルーマニアはかなりの被害を負うでしょうね……」

日野は唇を噛み締める。

像が蟻を踏みつぶさず道を歩くのは不可能であるように、魔術協会がどのような処置を行つたとしても人外同士で行われる聖杯戦争では必ず土地にも人にも被害が及ぶ。

魔術協会が社会への被害を食い止めるのも、一般市民の命を惜しんでいるわけではなく、ただ自分達の神秘が暴かれるのを恐れているだけだからだ。

「深刻なのはそれだけではない、なんと今回の聖杯大戦、『ルーラー』が召喚されるそうだ。」

「確かに聖杯戦争を調停するクラスでしたつけ」

「そう、そしてルーラーが召喚されることは聖杯を悪用される可能性が理論上成立したことだ」

「散々被害をもたらした上、さらに悲劇をおこそうというのか……！」

青年は声を荒げ、己の心にドス黒い感情を流し込む。

凄まじい怒気で周りの空気が冷えつく、鴻上は涼しい顔をしているが近くに控えていた秘書は思わず身じろぎをする。

そんな日野をなだめるように鴻上は青年の肩に手を置く。

「日野君、落ち着きたまえ、今回の敵は強力だ。冷静にならなければ我々に勝利はない」

青年はそう諭され、怒りを鎮める。

「すみません、少し熱くなりました」

「忘れないでくれ日野君、君の目的は罪のない人々のために戦うのであり、決して復讐というつまらないもののためではないのだ」

「はい・・・もうあんな悲劇は起させません・・・！」

日野はそう決意する、その眼差しには固い決意が込められていた。

記憶と嵐の前の静けさと旅立ち

雲一つとない空の下、一組の母子が手をつないで歩いていた。いつもは曇りの天気が多く、陰鬱としたこのロンドンも今日に限つては妙に解放性があつた。

巨大な塔が見えてくる位置にくると母親は自分の子供を腕に抱きあげた。

「ほら（）覧映司、あれがこのロンドンでも有名な時計塔よ」

「わあ、大きいねえ！すごいすごい！」

いかにも子供らしい感想を述べる。

後に憎悪し、嫌惡する対象になることを子供はまだ知らない。

「うつ・・・・・・・・・・」

大分懐かしい夢を見た。

まだ自分の人生が黄金に輝いていた時期、その最後の思い出だ。

ベッドの脇にある時計を見る、針はもうすぐ午前9時になる位置にあつた。

「いけない、里中さんと空港で待ち合わせしてんんだつた」

青年は汗で濡れたシャツを脱ぎ捨て外出用のカジュアルな服に着替える。

ホテルの部屋を出る前に黒色の物体とメダルの入ったホルダーを鞄に入れる。

そして、派手な柄の予備のパンツをポケットにしまつた。

「遅れすぎません里中さん、ちょっと寝坊しちやつて・・・・・・」

「気にしないでください、ご飯奢つてもらいましたし、どうせこの後観光するつもりでしたから」

そう言つて、彼女はロールキャベツを口いっぱいに頬張る。

テーブルの脇には皿の山が築かれていた。

鴻上ファンデーションから多額の報酬をもらつてゐるとはいゝ、懐を心配したほうが良さそつたと日野は内心苦笑した。

「日野さんは何か食べないんですか？ もうお昼を回つてますよ？」

その問いに日野はビクッとした。

「い・いえ、今日は遅めの朝食を取つたので後で頂きます」

里中は一瞬日野の様子に疑問は感じたものの深くは追及しなかつた。

「それでは日野さん……氣を付けて下さいね……」

「はい……必ず生きて帰ってきますよ」

その言葉を最後に日野は彼女を見送る、最後の言葉は鴻上の秘書としてではなく、里中個人のものだつたかも知れない。

心を込めた彼女の言葉に対し、自分は嘘をついてしまつたと日野は内心深く反省した。

(さすがに……今回は厳しいかな……)

今まで、自分が生き残つてこれたのもただ単に敵が弱かつた上に、運がついていたというのも大きい。

今回の敵は一人ひとりが強力だ、もう自身の幸運に頼るのには限界を感じていた。

ふと、空を見上げる、分厚い黒灰色の雲に覆われた空は“今にも泣きだしそうな”という表現が相応しかつた。

道路の脇に停めていたライドベンダーに跨る。

ひとまず、ユグドミニアの本拠地があるトウリファースへ向かう、そこで戦いの火蓋が切られるはずだ。

ヘルメットをしっかりと被つて覚悟を決める、そうだ、もう引き返せない、せめてこの選択が間違いではなかつたと胸を張つて言えるよう努力するしかない。

死地に向かつてバイクを走りだせる、最初から戻るつもりはな

い、引き返すならこんな無謀なことはせず日本で平和に暮らしてい
る。

あの絶望の日から目を背けるのはやめようと決意したのは他なら
ぬ自分自身なのだ。

始まりと怪物と対立

トランシルヴァニア高速道、トウリファスへ通じる唯一の国道ですでに最初の戦いが始まっていた。

神槍と聖剣がぶつかり合い、火花を散らす。

両者とも強大な力を持つ者どうし、衝突によつて周りの道路はすでに原型を留めることは叶わず瓦礫の山と化していた。

決着は未だつかず、互いの身体に傷だけが増えていく。

それでもなお、二人は戦いをやめない。

この殺し合う瞬間こそが唯一の目的であり存在意義。

なぜなら彼らは英靈、戦い続けた果てにその身を朽ちさせた求道者にして大狂人。

第二の生を得て現界したこの瞬間でも、その信仰を変えることは決してないのだ。

このまま両者は夜明け前まで一切の邪魔が入ることなく打ち合いを続けることになる。

—これにある例外が乱入しなければの話ではあるが
赤のランサーと黒のセイバーが間合いを詰めるために両者同時に踏み込んだその瞬間—

黄色に輝く大量の光弾が2騎に向かって容赦なく降り注いだ。
煙が舞い上がりあたりに立ち込める。

あまりにも突然の出来事に黒のセイバーのマスターであるゴルドとルーラーは一瞬判断が遅れた。

「何者です！姿を現しなさい！」
「せ、正々堂々の戦いに横槍を加えるなど恥を知れ！このゴルド・ムジークが相手をしてやる！」

大声を上げるも、内心ルーラーとゴルドは少し焦つていた。

なぜなら通常のサーヴァントの数十倍の知覚力を持つ彼女は、アサシンのサーヴァントは愚か通常の魔術師の気配さえも看破する。

しかし、さつきの攻撃を行つた何者かはルーラーと魔術師の素敵、人払いの結界さえも潜り抜けて誰にも気づかれることもなく、こま

で接近したのだ。

一瞬でも気を抜けば次にどんな攻撃が来るか分からぬ。
この場にいる全員と、この状況を傍観する者達も最大限の警戒を行う。

だがその必要はなさそうであった。

「ここはトウリファスへ繋がる唯一の国道、貴重な物資や医薬品を輸送するための道路はここしかない。それを・・・・よくもこんな瓦礫の山にしてくれたな！ここを破壊されたら一体どれくらいの人々が困るかわからないのか!!」

尋常ならざる怒りに満ちた声、その声の主は瓦礫の頂上に立つていた。

「なつ・・・・！」

あまりの常識からかけ離れた姿にルーラーは言葉を失う。

聖杯から与えられる知識でもあのような怪物に関するものは与えられなかつた。

その姿はまさしく異形、全身を黒色で包んだかと思えば、顔は赤、身体は黄色、足は緑と普通は考えられない配色だつた。

異形の戦士の右手には黒と青が混ざつた剣、左手にはなにやら銃のようなものが握られていた。

「ほう、何かと思えばこれはまた奇妙な乱入者だな。」

煙の向こうから何事もなかつたかのように赤のランサーと黒のセイバーが表れる。

今のが攻撃は完全に命中したはずだ、しかし2騎とも全くの無傷であつた。

（クソッ、対英靈用に改造したバースバスターが全く効かないか・・・予想してたとはいえ今回の英靈は間違いなく一流ばかりだ。）

内心、異形の怪物は歯噛みする。

戦いを止めるために奇襲をかけたはいいものの、このままでは一流のスペックを誇るサーヴァント3騎と戦わねばならなくなる。

（切り札を切るか・・・・いや、まだこんな前哨戦で使つては後がない、どうするか・・・・）

「ルーラー、どうやら我々の戦いの前にあの怪物を協力して倒すこと
が先決のようだな。」

異形の怪物は右手の剣を構える。

「いいえ、赤のランサー、貴方は黒のセイバーとの戦闘を再開してください。あの部外者は私が相手をします」

「了解したルーラー、お互いの戦いの後にお前の命をもらうとする。「構いません。黒のセイバー、貴方もそれでよろしいですか？」

黒のセイバーは無言で頷く、特に不満はないという表情だった。

「ルーラー、この怪物が恐らく……」

「英靈殺し……ですね、私も噂で聞きましたが、このような存在は初めて目にしました。」

「不祥ながら、このゴルド・ムジークも援護致します。魔術師としても奴の存在は許すことはできません！」

「ハツ、何が許せんだ。根源というくだらん目的のために罪もない命を粗末にするお前たち魔術師こそ俺は許さん！」

怪物の言葉にゴルドフは顔を真っ赤にする。

それも当然だ、魔術師にとつて根源の到達は何を犠牲にしても優先すべき崇高な義務である。

それを“くだらない”的の一言で一蹴するのはすべての魔術師の存在意義を侮辱するに等しい。

「ふ、ふざけおつて！根源の到達こそが我々、いや全魔術師の悲願だぞ！それをくだらんだと！貴様何を言っているのか分かってー」「もういい、耳障りだ」

怪物の左手に握られていた黒い銃が火を噴く。

さきほどと同じ黄色の光弾が今度はゴルドに向かられる。

赤のランサーと黒のセイバーは無傷だつたが、普通の魔術師ではただではすまない。

「マスターッ！」

寡默を維持していた黒のセイバーも思わず叫ぶ。

しかし、攻撃がゴルドに命中する瞬間ルーラーが彼の前に割り入り、旗を回転させ、光弾をすべて弾いた。

「あなたにどんな事情があるにすれ、この聖杯大戦において土俵に上がる資格を持つのは赤と黒のマスター達とそのサーヴァントだけです。これ以上の狼藉を行うなら、あなたがなんであれこの場で討ち滅ぼします」

毅然とした態度でルーラーは怪物に警告する。

「サーヴァントによる無関係な人間への被害を食い止めてくれるならできるだけ最後に殺したかつたが……どうやら今倒す他ないようだな」

怪物は一步も引く様子はない、左手に持っていた銃を後ろに投げ捨て、両手で弓を引き絞るように剣を構える。

「私は誰の味方でもありません。ただこの聖杯大戦を司るのみです」

すでに、赤のランサーと黒のセイバーは戦闘を再開している。

怪物はかれらを止めるためにも目の前のルーラーを早急に撃破しなければならなくなつた。

英靈と怪物と攻防

「ツシ！」

掛け声と同時に怪物は前へと踏み込む。

地面を踏み台にし、自慢の脚力で怪物は一瞬にして距離を詰める（速い！）

いつのまにか怪物の剣先が彼女の目の前にまで迫っていた。

怪物の予想外の速さにルーラーは一瞬判断が遅れてしまう。

戦闘において、一瞬の隙は決して看過できるものではない。

しかし、だからといってこれで勝負が決まると考えているのなら早計である。

今回呼び出されたルーラーはこの聖杯大戦を司る一流のサーヴァントだ。

それゆえ違反を行つたサーヴァントに肅清を行える戦闘力がなければ話にならないのだ。

（けど、捉えられないスピードではない！）

判断が遅れたため回避はあきらめ、旗を使って剣先の軌道を自分の身体からずらした。

怪物の放つた突きは虚しく大気を貫く。

攻撃を受け流され怪物はそのままルーラーの後ろへ流される。

ルーラーは怪物の背中に向けて旗を垂直に振り下ろした。

怪物は身体を急反転させ攻撃を剣で受け止める。

だが、予想以上の重いひと振りに怪物は思わず右片膝をつく。

（重い！このサーヴァント、筋力はおそらくB以上だ！）

間髪いれずルーラーの蹴りが怪物の頭部に飛んでくる。

怪物は上体を大きくのけぞらせてかわし、そのままバク転で後方へと下がる。

状況は振りだしに戻った。

「少々驚かされましたがあ…今の攻防であなたの動きは分かりました。次は必ず仕留めます」

「へえ、そうかい、やつてみな」

ルーラーの挑発に怪物は怯みもしない、その余裕は蛮勇によるものではなく、確かな根拠が存在している。

(筋力も敏捷も技も彼女がすべて上…確かにこの形態では勝てないな)

怪物は自分と彼女の性能差を冷静に判断する。

(ならばここで切り札を切るか?いや、まだこんな序盤で使用してしまうと相手にただ有利な情報を与えるだけだ。)

「ハア!」

代わつて今度はルーラーが先手をとる。

ルーラーの振るう旗が怪物を地面ごと薙ぎ払おうと襲い掛かる。

さきほどの攻防で怪物は学習したのか旗を正面からは受けとめず、上に跳躍して回避する。

そして地面に落下する勢いに任せて両手で握った刃を叩きつける。

ルーラーは正面から剣を受けた。

怪物とは違つて彼女は自慢の筋力で攻撃を防ぎきる。

そのまま鍔迫り合いに持ち込むも怪物の目の前からルーラーの姿が一瞬にして消える。

怪物が背後の気配に気付いた時にはすでにルーラーの旗は自身の身体に叩きつけられる寸前だつた。

この距離ではもう回避も剣での防御も間に合わない。

怪物は右手を剣の柄から離し、手甲に内蔵されていた鉤爪を展開し、紙一重でガードする。

左手の鉤爪も展開し、剣を捨て、切り上げた。

ルーラーは鉤爪を真後ろに跳躍してかわす。

ただ、完全に回避することはできず、鉤爪はルーラーの服を掠め、数センチの切り傷を与えた。

状況は再度振りだしに戻る。

始まつたばかりの戦いは決着が付かない泥沼と化した。

中斷と謎と正体

その後も戦いは続き、気づけば空が完全な闇から、うす暗いダークブルーへと変わっていた。

先に戦闘を中断したのは黒のセイバーと赤のランサーだった。
「このままでは、日が昇るまで打ち合うことになるな。俺ではそれでも構わんが、そちらはどうだ。お前のマスターはうんざりしているようだが」

マスターに言葉を封じられている黒のセイバーはわずかな逡巡を切つて捨てて、口を開く。

「願わくは、次こそは貴公と心ゆくまで戦いたいものだ」「ああ、オレは実に運が良い。黒のセイバー、初戦にお前と打ち合えた幸運を心から感謝しよう」

黒のセイバーの言葉に赤のランサーは掛け値なしの称賛を送る。
二人の間には戦士としての絆があつた。

その濃密な雰囲気につれられるように、いつの間にか怪物とルーラーも戦闘をやめていた。

「では、さらばだ。黒のセイバーよ」

赤のランサーはたちまちの内に、その身を靈体と化して消えていく。

そして空は、薄紫色に染まりだしていた。

「夜が明けます。あなたがサーヴァントでなくとも日が出ている間の戦闘は何があるうと許しません。大人しく降伏を……」

そう言って振り返ると異形の怪物の姿はどこにも存在しなかつた。
「まあ、いいでしよう」

聖杯大戦はまだ始まつたばかりに過ぎない。

戦いが続く限り彼は現れるだろう、倒すのはいつでもできるはずだ。

ルーラーはそう気分を切り替える。

（ただ……、あの程度の実力でどうやって英靈を屠つたのでしょうか……？）

疑問を抱きつつも、ルーラーは黒のセイバーとそのマスターの所へ真つすぐ歩きだした。

トウリファス郊外にある森林、その中でも特に大きな大樹の幹に異形の怪物は背中を預け座り込んだ。

「さすが一流のサーヴァント……おそらくアレは大分手加減されていたな……」

怪物はさきほどの戦闘を思い出し、冷静に分析した。

ルーラーは怪物に対して“討ち取る”とは言つたものの、一晩かけてもどごめを刺すに至らなかつた。

仮に本気を出していたなら、怪物は三合と持たなかつただろう。「やはり気づかれたかな……俺が人間であることに」

怪物は自分の腰に巻いてあるベルトに手を伸ばし……三枚のメダルのようなものが入つたバックルの部分を斜めから真横に戻した。みるみるうちに怪物の面影が消え、一人の青年に変わった。

その青年の顔は疲労と極度の緊張の余韻で苦痛に歪んでいた。“英青年の名は日野映司、彼こそが、今の魔術世界を騒がしている“英靈殺し”の張本人であつた。

時間をかけて息を整え、余裕を取り戻した上で再度さきほどの戦闘を分析する。

（今回は手加減していたルーラーが相手だつたからこそ、互角に戦えていた。だがもし……あのセイバーとランサーが相手だつたらおそらく……。）

日野映司が今まで戦つてきた英靈の中でのセイバーとランサーの2騎はもはや別格だつた。

さきほどの戦闘で確認した英靈とは別に、赤と黒の両陣営にはまだ姿を見せていない一流のサーヴァントを多く存在している。

対して、日野映司はまさに孤立無援の状態だつた。

赤と黒、どちらかの陣営に所属しているわけでもなく、時計塔やユグドミレニアといった魔術師達の味方でもない。

むしろ魔術師は彼にとつて英靈と同じく殲滅すべき敵である。

そのためこのルーマニアにおいて彼の味方というものは存在しない。

一応、日野映司を支援している組織はあるものの、戦いに直接参加することはない。

これには2つ理由がある。

1つ目は魔術協会に勘づかれる恐れがあるのと、2つ目は魔術師や英靈と戦う手段を持つているのが日野映司を置いて他にいないからである。

しかし、日野映司は一人で戦う事を心苦しく思うことはない。

誰もこんな不毛な戦いに巻き込みたくないし、元々自分は天涯孤独のようなんだ。

体力が回復し、戦闘の余韻からも解放された日野映司はあらかじめ停めておいたトライベンダーに跨り、森の中の獣道を真つすぐ走り出した。

警戒と紛争と村

「して……あの慮外者について貴様らは何を感じた？」

ユグドミニアの本拠地である古い古城。

その奥にある玉座に座すサーヴァントは自分の家臣達に対して意見を求めた。

「私めから申しますと……あれを英靈と呼ぶにはいささか脆弱といえます。」

玉座の傍に立っていた1人の魔術師が誰よりも最初に口を開いた。

その魔術師こそが今回の聖杯大戦を引き起こした張本人、名はダーニック・プレストーン・ユグドミニアである。

「一理あるなダーニック、確かにあの程度ならバーサーカはおろか、ライダーでも勝てるだろう。」

異形の怪物はルーラーを相手に一晩なんとか渡り合うことに成功した。

しかし、それはルーラーがあからさまに手を抜いていたからであり、本来なら一瞬で勝負がついていた。

もちろん、この玉座の間に集うすべてのマスターとサーヴァントがそれに気づいていないはずがない。

その上で、全員が疑問なのは「なぜ今まで怪物は英靈を屠ることができたのか？」ということだ。

「大賢者よ、そなたはどう感じた」

ランサーが次に意見を求めたのは黒の陣営のアーチャー、真名はケイローンである。

「そうですね、いくら亞種聖杯戦争の型落ちした英靈でもあれに勝利することは容易です。そう考えると……恐らく何かしらの切り札があるかと思われます。警戒は続けるべきかと」

ギリシャ神話において様々な英雄を育てあげた彼の分析は非常に論理的であり、的確であった。

「よかろう……キヤスター、さらに監視用のゴーレムを増産し、あの慮外者を探し出せ」

「了解したランサー」

ランサーに命令を受けた黒のキャスターは無感情に受諾した。

「エイジ！こっちも頼む！」

「分かりました！」

砲弾で破壊された建物の残骸を担ぎながらも、俺は張りのある声で返事をした。

政府軍とゲリラ軍の両陣地に挟まれているこの村はいつどちらの軍勢に攻め込まれてもおかしくはなかつた。

今のところ被害がでたのは一部ではあるものの、村人の不安は募るばかりであつた。

村人総出で被害の修復に努めるものの、人手が全く足りておらずまるで間に合つていない。

2か月前までは他の国のボランティアがいたが、紛争が激しくなるにつれ、徐々に帰国していった。

「よしみんな！今日の仕事はこれで終わりにしよう！」

村の村長さんの掛け声で村人は片づけを始める

「ふー、今日はこんなもんか」

夕暮れも近くなってきたので俺もシャベルなどの工具を納屋へ片づけにいく。

納屋からると村長の息子さんがやつてきた。

「エイジ！今日もお疲れ！」

「お疲れ様です！橋の方はどうでしたか？」

「いや・・・・思いのほか被害が大きくてな・・・一度取り壊して作り直さないとダメだ」

晴れ晴れとした笑顔がトレードマークである彼も今回ばかりは顔を曇らせた

「そうですか・・・確かにあの川は流れが早すぎてボートで渡るのは無理でしたつけ？」

「ああ・・・輸送車には悪いが2日かけて回り道してもらおう・・・
その間は俺たちで何とか食つなぐしかない・・・」

2人は会話をしながら村人達の様子を眺める。

彼らは表面上では明るく振舞っているものの、不安な表情が時折出
ていた。

「エイジ！」

後ろから声をかけられ振り向くと俺の上半身めがけて1人の少女
が突っ込んできて、そのまま押し倒された。

「いてて・・・・・」

「エイジ！エイジ！見てみて！今日ねとつてもいいものを見つけたの
！」

少女が持ってきたそれは、葉っぱと実がついているオリーブの枝
だつた。

「オリーブか・・・確かに平和の象徴だつたね」

「うん！これを村に飾ればきっと争いも終わるよ！」

村が危機的状況に陥っているのにも関わらず希望を持ち続ける少
女の姿に俺は不意に涙が出そうになつた。

「こらエルパ、エイジが困つてているだろう退いてあげなさい」

この少女は村長の息子の一人娘である。

「はーい、パパ」

「それじやあエイジまた明日も頼むな、帰るぞエルパ」

「うん！じゃあねエイジ！」

「気を付けてね」

エルパを担ぎ上げ村長の息子は帰路につく、二人の姿が見えなくな
るまで俺は手を振り続けた。

気が付くと、完全に日は落ち辺りは真っ暗な闇に包まれていた。
「せめて子供だけ達でも何とかできてばいいのだがな・・・」

いつの間にか俺の隣には村長が立っていた

「大丈夫ですよ！きっと紛争も今に終わります！俺もそれまでこの村
にいますから！」

俺は自分にも村長にも言い聞かせるように励ました。

「なあエイジ、もうこの村に残っている外国人はお前だけだ。悪いことは言わん……日本政府もとつぐに避難勧告を出しどうるだろう……お前にも家族がいるはずだ……日本へ戻りなさい。」

「村長……それは……！」

「まだこの村が終わると確定したわけではない。しかし……最悪の事は考えて何の関係もないお前だけはせめて…………。」

村長の瞳から光がなくなり始めていた。

「俺もこの村の一員です！ 最後まで頑張らせて下さい！」

「そうか……そうじやな！ ジャあ明日も必死に働いてもらうぞ！ エイジ！」

（良かつた……元気を取り戻してくれたか……）

心からの叫びが効いたのか村長の瞳にまた光が戻ってきた。

「あっ！ 村長見てください！ 今日は星がよく…………あっ」

遠くの森の中から2つの光が放たれた。

その2つの光は天高く飛んでいくと、パツと弾け、一瞬だけ闇夜を照らした。

「政府軍の照明弾じゃな」

「照明弾を撃つてきたのは3日ぶりですね、一応村人の皆さんに注意を呼びかけましようか」

「そうじやな、明日からまた気を付けて作業をしてもらつて……いかん!! エイジ!!」

村長が必死の形相で俺の後ろにある空を指さした

「え？ どうしたんで……？」

そう言つて後ろを振り向く。

満天の夜空から大量の青い星のようなものが俺たちに向かつて容赦なく降り注いだ。

想定外と森林と狂戦士

ルーマニアの曇下がり、トウリファス郊外の草原にテントを張つて
いた映司はゴリラカンドロイドの警告音でたたき起こされた。

「クソッ！ 一体あいつらは何を考えているんだ！」

ゴリラカンドロイドはサーヴァントが実体化し、大きく移動した場合に警告音を出す設定にしており、この他にも日野映司は数種類のカンドロイドを鴻上ファウンデーションから貸し出されている。

聖杯大戦が始まる前、映司はさらに追加のカンドロイドをキャリー ケース一台分ほど里中から受け取つており、そのほとんどをルーマニア全土に放つていた。

そのためルーマニアのどこかで何か不審なことがあれば遠隔通信で日野映司の手持ちのカンドロイドに情報が一瞬で送られてくるのである。

今現在移動中のサーヴァントを追跡しているタカラカンドロイドから的情報によると。どうやら森を突つ切つて真っすぐ黒の陣営の本拠地に向かっているようだ。

「この単細胞っぷりから見るにおそらくバーサーカだな……マスターと仲違いでもしたのか？ いずれにせよあのイデアル森林には猟師やたくさんの人が出入りしている、急いで止めないと！」

最低限の荷物を引っ掴み、テントを飛び出し、ヘルメットを着ける間も惜しみライドベンダーを走らせた。

——その男は筋肉（マッスル）だった

バーサーカと鉢合わせしてしまった老猟師は後に彼をそう表現した。

「あつ・・・・・あつ・・・・・・」

鹿を追つてこの森に入った老猟師はその巨大な姿と不気味な笑み

に圧倒され言葉も出ない。

数十年間生きてきた中で最大の危機だと自分の直感が告げている。しかし、逃げようにも攻撃しようにも身体が全く動かないし、動けない。

両手に握られたライフルも効かないだろうし、逃げても追いつかる自信があつた。

まさしく絶体絶命、自分の人生は今ここで終わるのだと悟り、老猟師は目をつぶつた。

「セイヤアアアアアッ！」

聞こえたのは自分の肉が潰れる音ではなく、バイクのエンジン音と若い男の叫びと物と物が強烈にぶつかったような音だつた。

次に目を開けるとそこにいたのはバイクに跨つた異形の怪物だった。

その姿には異質さが目立つが、どこか神々しく、また頬もしくも感じられた。

「今の内です！早く逃げてください！」

怪物は老猟師に向かつて振り返ると必死な様子で叫んだ。

怪物の心からの叫びに老猟師はようやく自分を取り戻し、多少おぼつきながらも森林の外に向かつて一目散に走りだした。

怪物は赤のバーサーカが吹つ飛んだ方向に向き直る。

やがて奥から地響きのような足音と共に赤のバーサーカは戻ってきた。

「フハハハハハ！残念だつたな圧政者よ！あの程度の攻撃では吾輩の歩みは止められぬのだよ！」

怪物にとつて今のライドベンダーの体当たりがまともに通じるとは考えていなかつた。

怪物はバイクから降りるとルーラーの時と同じように剣を構える。「お前・・・・バーサーカだな？この聖杯大戦において日の出でいる内に戦闘を行おうとするのは禁止されているはずだ！」

昼間にサーヴァントが実体化していることに対してはまだ目をつぶるとしても、こんな昼間に敵の本拠地に攻め入るのは一般市民への

被害、および神秘の秘匿という観点からも明らかにルール違反だった。

「フハハハハハ！圧政者を駆逐するのに昼も夜も関係ないのである！」

（ああ、こりやまた大分頭のネジが飛んだバーサーカだな）

怪物を激戦を予想し、剣を握る手に力をこめ、全神経を集中させた。

ピンチと切り札と重力コンボ

「わが愛によつて塵になるがいい！」

振り下ろされたバーサークの大剣を怪物は跳躍して何とか躲す。

一七八ノツ!

お返しと言わんばかりに怪物は自慢の跡りをハリサリ力の顔面に

アハハハハ！その程度が圧政者よ！

ハリサートは怪物の跡りをもろに食らつたはずか
ず不気味な笑みを浮か

「では、こちらの番である！」

バー サー カは 怪物 の 足 を 捣 んだまま 周 囲 の 地 面 に 何 度 も 何 度 も 叩 き つけ 終 い に 近く の 巨 木 に 向 か つ て 投 げ 飛 ば し た。

叩きつけられた。

(あつ・・・・・ぐう・・・・・ますい・・・・・ルーラーはまだか・・・・・)

雇に戦闘はあきらかにルール違反なのでルーラーが全力で駆けつけてくるはずではある。

さらにバーサーカは自制を行わず全力全開で戦闘を行うクラスであるかつ、怪物が森林にやつて来るまでずっと実体化していたので本來ならばもう魔力切れになつてもおかしくはないと怪物は計算していた。

しかし、ルーラーがやつてくる気配はなく、バーサーカも魔力切れで疲労が出てくるはずなのに未だ不気味な笑みを浮かべながらこちらへ近づいてくる。

(やるしか……ないか……バーサーカは絶対に手加減はしてこ
ない……)

怪物は切り札を一枚切ることを決意した。

(ラトラーダー……いやこいつは攻撃をスキルか宝具で吸収している……・・・・・ タイマンな状況かつ一瞬で決めるには・・・・・)

「ハハハハハ！ 何とも脆いな、圧政者よ！」

バーサーカは敵を痛めつけて満足したのか余裕の足取りで怪物に向かつて歩を進めていく。

(ツ・・・・・！ 今だ！)

怪物は瞬時にベルトのバックルを真横に戻しメダルを全部抜く。そして今度は白銀に輝く3枚のメダルをベルトに差し込む。

怪物は立ち上がりながら再度バックルを斜めに倒し、ベルトの右に取り付けられた黒色の物体を右手に握り、ベルトのバックルに沿つて勢いよく滑らせた。

『サイ！ ゴリラ！ ゾウ！ サツゴーゾ・・・・・ サツゴーゾ!!』

怪物のベルトから声と、そして重厚そうな音楽が森林に響き渡る、同時に身体にも変化が表れた。

体色は赤、黄、緑から全身白一色となり、複眼は緑から赤に、頭にはサイを思わせる大きな一本角、両腕はゴリラのように太く、足はゾウのような重みを漂わせていた。

「ほう・・・・？ さらなる圧政を私に敷こうというのか、いいだろう！ わが身を以てその傲慢を打ち碎こう！」

さすがのバーサーカも怪物の変化に気づき、即座に大剣を振りかぶった。

刹那―――怪物の剛腕から繰り出されたストレートパンチがバーサーカの顔面をとらえ、さきほどとは逆にバーサーカが大きく吹き飛ばされ岩に叩きつけられた。

「第2ラウンドだ、バーサーカ」

状況は完全に逆転した。

2 戦目と2騎と2回目

「オオオオオオ!! 圧政者よ!!」

「お前はそれしか言えんのか！ この脳筋！」

岩から身体を引きはがしたバーサークは懲りずに真正面から怪物に向かってくる。

「ハア！」

怪物はゴリラのドラマミングのように自分の胸を両腕で連打する。すると怪物とバーサークの間に斥力が発生した。

怪物が胸を叩く度にバーサークの身体は徐々に空中へと浮かんでいく。

「ヌウウウウウ！ これしきのことお！」

バーサークは空中で必死にもがくも身動きを取ることができない。

怪物はバーサークが空中に浮いたまま能力を解除し、そのまま地面へ突き落した。

怪物の猛攻はまだ止まらない、力に任せた打撃のコンビネーションを打ち込み、最後は足の重量キックを命中させバーサークを大きく突き飛ばした。

「中々やるな圧政者よ！ たがしかあし！ 私の肉体は打ちつけば打ちつけるほどより鉄のように強くなるのだ!!!!」

バーサークの言葉通り、彼の身体はさつきまで怪物の猛攻で血だらけだつたはずだが、いつのまにか血は止まり、さらに肉体のサイズがさつきよりも大幅に増えていた。

「そうか・・・ならここで決める!!」

『スキヤニングチャージ!!』

怪物は黒色の物体をもう一度バツクルに滑らせると、周りの木片や岩がバーサークに一気に集中し、拘束する。

「オオオオオオ!!」

雄叫びを上げて瓦礫を引きはがそうとするが怪物の能力が強いためびくともしない。

怪物は両足をピツタリそろえ空中へ飛びあがり、そしてそのまま両

足を地面に叩きつけた。

怪物が地面に着地すると同時に重力圏内に入つたバーサーカはそのまま地面に埋め込まれ、大地を割りながら怪物の間合いへ引き寄せられる。

バーサーカを一撃で必ず仕留めるため怪物はメダルのエネルギーを両腕の拳と頭の角に最大限に集中させた。

「セイヤアツ！」

バーサーカが間合いに入ると同時に、銀色に強く発光した拳と角をバーサーカに向けて繰り出した。

「ふむ、さすがにまずいか」

その瞬間――怪物の身体は一本の矢によつて大きく吹き飛ばされた。

「ぐわあああああ！」

（な、何だ！いきなり森の中から・・・・！）

「バーサーカ！ここは私達に任せて汝は要塞へ向かえ！」

「おお！感謝するぞアーチャーよ！圧政者を倒した暁には共に凱歌を

叫ぼうぞ！フハハハハ！」

バーサーカはわき目も振らず要塞に向かつて走りだした。

「あつ・・・・クソ！までえ！」

怪物は慌てて追いかけるも森の中から矢が飛んできて進行を妨害した。

（後ろかつ！それも2騎！）

矢の飛んできた方向で敵の位置と人数を瞬時に把握した怪物は振り返りざまに両腕のパーツを後ろの森にめがけて撃ち出した。

「残念・・・こつちだぜ」

怪物の己の背後に今まで感じたことのない尋常ならざる殺氣を感じた。

「ウワアアアアアアア！」

反射的に怪物は裏拳を放つもそこに敵の姿はなかつた。

「ノロマめ、こつちと言つてんだろ!!」

（なつ・・・・・・！）

思考する間もなく怪物の脇腹に蹴りが命中した。

「はツ、英靈殺しと聞いて期待してみたがこれはとんだ期待はずれだなあ。」

ダメージで震える身体を起こす怪物に向かつて、そのサーヴァントは挑発とも取れる言葉を放つた。

怪物は今の中撃で目の前の前のサーヴァントがどれほどの英雄であるのかを感じ取れた。

（今まで、サーヴァントと戦つてきたから分かる・・・このサーヴァントは黒のセイバー、赤のランサーと同格だ・・・・・！）

さらに後ろの森に隠れているもう一騎のサーヴァントも非常に厄介な存在である。

（大英雄ほどの殺気はないが、今にも俺を射抜かんとする眼光、そして正確無比な射撃、これは非常にまずい・・・・。）

どちらか一騎なら逃げる方法を考えていたが、瞬間移動に匹敵する速度を誇る英雄、針の目を易々と通すような弓の腕を持つ弓兵が同時に襲い掛かってくる、もはや逃走は不可能だ。

（今度こそラトラーターか・・・いや森の木々が邪魔だ、ここはこいつでいくしかない・・・・。）

怪物は姿を変える時と同じようにバツクルの部分を真横に戻し、メダルをすべて抜き取つていく。

「気を付ける！ライダー、さらに何かくるぞ。」

森の中から声がした。

警告をしてるだけで矢を放たないのは彼らの余裕の表れである。

（ライダーで、この強さか・・・相當な大英雄とみた、アーチャーは言

わざもがな、セイバーもおそらく相当な実力者だろう・・・。)

ライダークラスは基本的に乗り物か馬に乗った状態で戦闘を行う。

騎乗せずに戦闘行為を行うことはライダーのサーヴァントにとって大きなアドバンテージを失うに等しい。

それを放棄してもなお、圧倒的な実力をこのライダーは持つていた。

「はっ、心配いらねえよ姉さん、アンタは他のサーヴァントの警戒をしててくれ。」

ライダーは自分一騎のみで怪物を制すと宣言した。

さらに怪物が次の力を解放するまで待つつもりである。

その間に怪物はメダルをすべて入れ替え、バツクルを斜めに倒し黒色の物体を滑らせた。

『クワガタ！カマキリ！バッタ！ガタガタガタ・キリッバ・ガタキリバッ！』

怪物は2回目の形態変化を完了する。

戦いはまだ終わらない。

大英雄と瞬足と最強コンボ

「ハアッ！」

怪物のクワガタを模した頭部から緑色の電撃を辺りにまき散らす。

「へえ！姿が変われば攻撃も変わるんだな！」

そう感心しながらライダーは自慢の俊足で怪物の攻撃範囲から距離を取る。

その隙を見逃さず怪物は後ろの森に跳躍する。

「ハツ！逃がさねえよ！」

ライダーは怪物の後ろ姿を追う。

怪物が形態を変えたとはいえ、敏捷の差は未だライダーが大きく優位である。

そのまま距離を詰め怪物の後ろ姿に槍を突き立てる。

しかし、槍を突き立てる寸前、左方から現れたもう一体の怪物がライダーに斬りかかる。

槍で攻撃を受け止めたライダーは空中で一回転し回し蹴りを放ち怪物を彼方へと飛ばす。

「なるほど、分身か……ならばこうだな……。」

ライダーは怪物の能力を把握するともう一体の怪物の追跡を中止し、開けた場所の真ん中に降り立つた。

「さあ来いよ、俺の身体にその刃を叩きつけてみろ！」

ライダーは槍を構えず両手を広げ自分の身体を無防備にさらした。その隙を逃さず森の中から一斉に20体の怪物が飛び出し、ライダーの身体に、カマキリの鎌のような刃で斬りかかった。

ある怪物は頸動脈に、ある怪物は脛に、ある怪物は脇腹に、と20体すべての怪物が人体の急所に刃を突き立てた。

人体の急所はサーヴァントにとつて靈核がある位置もある。

普通のサーヴァントならここで勝負ありである……。

普通のサーヴァントならの話だが……。

「はつ、やはりテメエは俺の身体を傷つけるに値しねえみたいだな。」
（なつ・・・・・刃が・・・・・。）

怪物達の刃は肉や骨はおろかライダーの皮膚さえも切り裂いてはいなかつた。

この硬さは鎧のような守りではなく、攻撃そのものに対する明確な拒絶に近い。

いずれにしろ、このような形で攻撃が効かなかつたのは怪物にとって初めての体験であつた。

(くつ・・・・ならば次の攻撃を!)

「隙だらけだぜ！英靈殺しつ!!」

怪物達が次の攻撃を繰り出す前にライダーが自前の槍を全方向に回転させ切り裂いていく。

みるみるうちに怪物の分身は消え去り、最後に残つた怪物は吹き飛ばされ地面に叩きつけられる。

(ああああああああああああ!!!!いたいたいたいたちあちあいな!たいあつえちたうえいえたあ "あ"!!あ "あ"あ "あ"あ "あ"あ "あ"!!)

「痛い」という言葉さえもが可愛く思えるほどの苦痛が怪物に襲い掛かる。

怪物のこの形態は分身を多数出現させ敵を躊躇することができる。

しかも、一体一体の分身はパワーダウンせず、そのままのスペックで戦える。

だが強すぎる力には代償が付くように、この能力にも弱点が存在する。

そのまま自分自身のコピーを作る以上、一体一体が受けるダメージもそのまま返つてくるのだ。

先ほどのライダーが放つた全方向の槍の回転斬りは20体すべての分身をズタズタに切り裂き消滅させた。

分身が1つ消えるほどのダメージ、その20体分を怪物はその身に受けなければならなかつた。

「あ "あ"あ "あ"あ "あ"あ "あ"!!!!あ "あ"あ "あ"ツ!!..」

怪物は絶叫し地面にのたうち回る。!!..

全身を切り裂かれる痛みは常人にとって想像を絶するものである。

しかし、怪物はその姿をまだ人間に戻してはない。

それは“戦える”“まだ戦う”という無言の意志でつた。

「なるほど……テメエの分身のダメージはそのままそつくり返つて来るんだな」

ライダーはのたち回る怪物を片足で押さえつけ槍を構える。

「あ“あ”あ“あ”あ“あ”!!」

痛みに悶えながらも怪物はライダーの足を殴りつける、しかし先ほど同様全く効いている気配はなかつた。

「悪いが……とどめだ。」

ライダーの槍の切つ先が怪物の喉元に直進する。

絶体絶命、しかし怪物に状況を開拓する力は残つていなかつた。

誓いと地獄と覚醒

「悪いが……とどめだ。」

ライダーの槍が怪物の喉を捉える。

「あ“あ”あ“あ”あ“あ”あ“あ”！」

怪物は“まだ負けてない”と言うようにライダーの足を何度も何度も殴りつける。

怪物の喉を押さえつけているライダーの足の力が想像以上に強く、このままでは槍が喉を貫通する前に意識がなくなりそうであつた。
(ダメ…………だ…………、まだ、まだ…………どこにも届いていないのに……)

怪物の心の叫びも虚しく意識は徐々に暗転していく。

(結局……無力なままだつたなあ……オレ)

怪物が最後に浮かんだ言葉は命乞いではなくただただ己の無力への嘆きだつた。

「エルパちゃんはさ、紛争が終わつて大きくなつたら何がしたい?」

夕暮れ時、日野映司は村への道を少女と手を繋ぎながら歩いていた。

彼女の遊び場は歩いていくと村から少し遠い、なので暇つぶしにそんな他愛のない話題を振つてみた。

「そうだね!他の子たちはお金持ちとかスポーツ選手になりたいと言つてるけど、エルパはやっぱり村でお母さんになつておばあちゃん

になりたい！」

「そうなんだ、うん、エルパちゃんならきっとなれるよ。」

確かにその願いは大きい夢ではないかもしれない、しかし映司にとつては一番しつくりくるものであつた。

そんな誰しもが望むささやかな幸せ、それを守るために自分は世界中を旅しているのだと改めて気づく。

「エイジのお母さんは二ホンにいるの？」

その遠慮のない問いに映司は本当の事を伝えるか頭を悩ませる、しかし今は彼女と二人きりなので真実を伝えることにした。

「もういないよ……エルパのお母さんと同じように悪い奴らに殺されちゃつたんだ。」

ショックを受けたエルパはうつむきながら目に涙を浮かべる。

「……ごめんさい、エイジのお母さんがヘータイに殺されたなんて知らなかつたから……。」

“こりや失敗したな”とエイジは心の底から深く反省する。

いくら心の強い彼女でも誰かの悲しい過去を受け流せるほどには成長していないのだと映司は身をもつてしつた。

本当ならここでこの話題は中止するべきではあるが、映司はひとつ訂正しなければならないことがあつた。

「違うんだよ……エルパちゃん、俺の母さんは兵隊に殺されたんじやない、もつと、もつと、ずっと悪い奴らに殺されたんだ……。」

映司は苦い記憶を思い返すように、自分の母親の臓物が飛び散った自分の顔を撫でる。

「でも……、そいつらを憎んでもどうしようもないし母さんは返つてこない。だからこそ、もう2度とエルパちゃんや他の人たちに悲しい思いをさせないために俺は頑張るんだよ。」

「エイジ……。」

「エルパちゃんは俺が守るから……だから君はもう泣く必要はないんだ……。」

映司は優しく少女の頭を撫でる。

「うん……ありがとうエイジ……！。」

少し涙を浮かべたものの、エルパはいつもの日向のような笑顔を向ける。

(うん……やつぱり君はその笑顔の方が素敵だ……俺もこの笑顔を守れるようにもつと……。)

映司は少女の笑顔をきっと守つて見せると心の中で誓つた。

「ああ……嘘だ！ 嘘だ！ ……こんなの嘘だあ!!」

映司の目の前にはこの世の地獄が広がつていた。

藁や木材でできた住居はあつという間に燃え火の海となり、肉と血の焦げる不快な臭いが鼻に突く。

村の住民が必死に耕した畑は先ほどの攻撃によつて見るも無残に荒らされ、村の平和を願つたシンボルであるオリーブの木はその願いを嘲笑うかのようにズタズタに引き裂かれていた。

家々はすべて焼け、生存者は皆無、しかし映司は地獄の中を僅かな希望を求めて進む。

(せめて……せめて彼女だけでも……!)

自身も切創と火傷でボロボロになつた身体を引きずりながらエルパの家へと向かう。

「うええん……グス……グス……。」

彼女の家に近づくにつれ、すすり泣く声が耳に入る。

「待つて……今……行くから……!」

嗚呼、あれほど悲しませないと彼女に約束したはずなのに……
また自分は何もできなかつた。

すすり泣く声は徐々に大きくなつていく、しかし彼女の家はまだ見
えない。

「ウ　ウ　ウ　ウ　ウ　ウ　ツ！」

怪物は突如唸り声を上げ、左手でライダーの槍の穂先を掴む。

「へえ、まだやるかい！ そうこなくちゃあなあ!!」

ライダーは槍を押し込む力を強くする、しかし怪物の力が相当強く
徐々に押し戻される。

「なつ・・・・・くそコイツどこからそんな力が・・・・・！」

「何をしているライダー！ 早く止めを刺せ！」

たまらずライダーは両手で怪物に槍を押し込もうとするものの、そ
れでも状況は変わらない。

ライダーの筋力ステータスはB+、これはルーラーと黒のセイバー
に匹敵する高さである。

並の英靈では例え両手を使つたとしても彼らは片手で軽くねじ伏
せてしまふだろう。

しかしこれはどういうことだろうか……この状況では怪物が
逆に両手を使った筋力B+のサーヴァントを相手に片腕だけで押し
返しているのだ！

（どうやつてやがる…！コイツの殺氣がいきなり変わつて、眼が紫色になつた途端急に強くなりやがつた！）

突如起きた不可解な現象にライダーは気を取られていた。

そして大英雄であれ、一瞬の隙は致命的なものであることを忘れてはいけない。

「・・・・・ツ！ライダー!!」

アーチャーが叫ぶも時すでに遅く、怪物の右手に握られた何かがライダーの左足を大きく抉つた。

奇跡と情けと涙

ライダーは久しぶりに感じた鮮烈の痛みに思わず顔を歪ませる。しかし同時に心の中では歓喜が沸き起ころる。

「う・・・・・うう・・・・・。」

怪物はライダーの足を抉った攻撃が自分の最後つ屁とでもいうようにつきまで握っていた何かを地面に落とし、身体を脱力させた。

強力な殺氣は消え失せ、複眼は紫から元の橙色に戻つていった。

今度こそ怪物は何もできない、だがいつまで経つてもライダーの攻撃は来なかつた。

「ハハハハ、ハハハハハハハハハ!!」

突然ライダーがまるで心の底から歓びを噴出させるように笑いだす。

(何が可笑しいんだコイツは・・・・?普通は無敵の身体に傷を付けられた事に憤慨する状況だろう。)

よく見れば奥にいるアーチャーも“信じられない”という顔をしており、ライダーの身体を傷つけるのは不可能に近いのだと怪物は理解した。

「そ、うか!そ、うか!貴様はオレの身体を傷つけることが出来るのか!!なるほど!やはり“英靈殺し”的名は伊達ではなかつたか!!ハハハハハハ!!」

ライダーに屈辱の怒りはなく、代わりに生涯の好敵手を得たとでも言うように笑つてゐる。

「フウ・・・・・・、よし姉さん。俺はコイツを見逃すこととする。」

突然の言葉に怪物もアーチャーも言葉を失う。

「何を考えているライダー、そいつは我々の戦いを盛大に狂わせるぞ。それに可能なら殺せとマスターに命じられたはずだろう。」

(悔しいがあのアーチャーの言う通りだ・・・・俺をここで殺すのが判断としては正しい、なのにあのライダーはなぜ俺を生かす・・・・・・!)

「姉さん、命令ではバーサーカの監視と偵察が最優先のはずだぜ?俺

たちが戦闘を開始してもうどれくらい時間がたつたかね?」

その言葉にアーチャーは軽く舌打ちする。

「いいだろうライダー、だがソイツを生かした責任はお前がとることになるぞ。」

「大歓迎だ、コイツはオレの獲物と定めた。他の誰にも取らせねえよ。」

（ああ……なるほど、アイツにとつて俺は都合の良い獲物か……、これはまた嫌なヤツに目を付けられたな……。）

怪物はライダーが自分の生かした理由を察すると心の底から辟易した。

「と、いうわけで『英靈殺し』よ、俺にとつてもお前にとつても今は決着をつける時じやねえ、だか……必ず本気で殺り合う時が来る、その時までに……お前の首を預けとくぜ」

そう言い残すとライダーはユグドミレニアの要塞へと向かつていった。

「命拾いしたな怪物よ、死にたくないならこれ以上私達の戦いに首を突っ込まない方が賢明だ。」

アーチャーもライダーの後を追うように森の中へ消える、残されたのは怪物ただ1人だけだった。

「ふつ・・・・・ふう“う”う“う”う“うぐ”ぐ“ぐ”つ
く・・・・・・・・。」

怪物は悔しさのあまり嗚咽を漏らす。

英靈に見逃された屈辱、自身の無力さを怪物はしかと噛み締める。（これじやあ……結局あの時と全く変わらないじゃないか……。）

！）

その夜、イデアル森林の中ではいつまでも誰かのすすり泣く声が聞こえたという……。

母と介抱と温もり

「わあ！すごい、高い高い！」

「ええそうね映司、とっても高いわね」

腕の中の子供は嬉しそうに声を上げ、母親は満足そうに笑みを浮かべる。

映司は赤ん坊の頃から親の仕事の都合で世界各地を転々としている。

その過程で歴史的建造物や世界遺産といった珍しいものをいくつも見てきた。

その中でも自分の目に映る時計塔は、特別な存在感を醸し出していた。

「さあ、帰りましようか映司」

母親はもう少し子供に時計塔を眺めさせてあげたかったが、時間が押してきているので早々に切り上げる。

「お母さん！今日の（）はんは何かな？」

「そうねえ・・・今日は・・・あれ？火事かしら？」

突如、サイレンが町中に鳴り響き、時計塔の周辺から複数の煙が上がる。

これだけならばただの火事だとも考えられるが、次の現象がそれを否定する。

「なんだ！爆発が起きたぞ！」

今度は爆発による火の手があがり、周りにいた民衆がざわめきだす。

あるものは爆発が起きた方向にカメラを向け、またあるものは怖いもの見たさに足を運んでいく。

「怖いわね・・・私達も早くホテルに戻りましょ」

危険な気配を感じていた母親は早々にこの場を後にしようとした

時—— 時計塔の方に向かおうとしていた男性二人が、黒色の脂を全身に塗

りたくつたような見た目をした巨大な四足歩行の獣に、頭から食いちぎられた。

一瞬の間の後、一斉に悲鳴が上がる。

中には腰を抜かす者や、あまりにも現実離れした光景のせいか呆氣にとられて動けいない者もいた。

「映司、逃げるわよ！」

だが母親は自体が尋常ではないことを瞬時に察し、獣が周囲の人々を喰い散らかしてゐる間に子どもを抱えたまま逃げ出す。

走つて走つて走り続け、ようやく泊まっているホテルの前につくと
母親は安堵し、子供を地面上に降ろした。

「ねえ・・・・・ママ・・・・さつきの一体なんだつたの・・・・・

？」

子供は事態を上手く理解できていなか恐る恐る母親に尋ねる。
そんな我が家を、母親は震える手で優しくなでながら語りかけた。
「ああっ・・・映司、もう大丈夫よ、何も心ば――」

母親はそれ以降の内容を子供に伝えることができなかつた。

なせなら・・・さきほど民衆を襲っていた獸が、母親の上半身を爪の一薙ぎでバラバラにしたからである。

“べちゃ”と子供は自分の顔に何かブヨブヨした生暖かい物体が飛び散つたのを感じた。

「うつ・・・・・うう・・・・・」

悪夢のせいですっかり重くなつた瞼を持ち上げ、ゆっくり上体を起こす。

辺りを見渡してみると、今映司が寝ているベッドを除けば、大量の薪やら道具やらが積まれており何らかの小屋であることが見受けられる。

すると、正面のドアがゆっくりと開き1人の少年が中の様子をうかがつてきた。

「お父さん！お母さん！お兄さんが起きたよ――！」

少年は外に向かつて大声で叫ぶと、映司に向き直り「ちょっと待つてね」と言つてドアを閉めた。

（どうやら俺はサーヴァントの戦闘の後、意識を失つたんだな……）
映司はライダー、アーチャーとの戦闘の後にあたる記憶がないためそう確信した。

しばらくすると今度は1人の女性が入室する、その手には温かいスープの入つた皿を載せたお盆が握られていた。

「すみません、ここはどこですか？ちょっと俺、昨日の記憶が曖昧でして……」

サーヴァントと戦つていたとは言えないので、映司は女性にそう誤魔化した。

「そうですか……ここはイデアル森林の中にある私達の家です。昨日主人と息子と共に家路についていたら血まみれで倒れている貴方を見つけてここまで運びました。かなり重症でしたので昨晩は主人と交代で付きつきり介抱をしたのですよ。」

映司は深く頭を下げる

「申し訳ありません、大分迷惑をお掛けしてしまったようで……」「いえ、大丈夫ですよ。最近は物騒なので傷が癒えるまではここにお留まりになつてください。」

「本当に……ありがとうございます。」

優しさ、温もりというものに触れたのはいつ以来であろうか、サー・ヴァンントと戦うようになつてからはよく覚えていない。

映司は零れそうになる涙をぐつとこらえてお礼を言つた。

驚愕と別れとシギショアラ

日野映司は傷の痛みに顔を歪めながら出発の準備をしていた。

本当は傷が癒えるまでこの家に滞在するつもりであったが、1日の間に状況が一変してしまっていた。

ベッドの上で朝食を食べていた映司は、偵察に向かわせたカンドロイドの情報と鴻上ファウンデーションが極秘で入手した靈基盤を見て愕然とした。

“赤のバーサーカは黒の陣営に捕獲された”、そこまでは許容範囲だ、しかし、“黒のセイバーが脱落した”のは全くもつて想定外だった。

最優と謳われるセイバーはそれこそ尖った性能はないものの、どんな相手でも柔軟に対応できるのが大きな強みである。

映司は数々の亞種聖杯戦争を見てきたが、その中でセイバーは終盤まで生き残っていることが他のクラスと比べ、比較的多かった。

映司はトウリファス国道での戦闘を思い返す。

あの馬鹿げた強さを誇る赤のランサーと互角の戦いをしていた以上、黒のセイバーは相当な大英雄だつたことに間違いない。

それを失った黒の陣営は今頃それを代替する戦力を見つけるのに躍起だろう、そしてそれを赤の陣営が見逃す手はない、これを機に一斉に総攻撃をかけるはずだ。

「そうなると……不味いな……」

いくらトウリファスが外界と隔離されているとはいえ、13騎のサーヴァントが同時に戦えばただではすまないだろう。

そう考えた映司は居ても立つても居られなかつた。

しかし、今この家を出ようとしても住人が身体を張つて止めるだろう。

それを予想して映司は日が暮れた頃に家を出ることにした。

最後の荷物をライドベンダーに乗せる。

ありがたいことにここの人たちは俺のバイクも忘れず回収してくれていたのだ。

せめてものお礼に玄関の扉の前に少しのお金を置き、深々と頭を下げる。

思い返せば、自分は今までサーヴァントとの戦いに明け暮れ、『温もり』というものに触れる機会が無かつた。

世界を旅していた頃の自分は色々な出会いをして、助け助けられ、喜びに満ちていた人間だった。

しかし、あの頃の俺はもはや見る影もなく、サーヴァントの冷酷さ、残忍さに俺も影響を受けてしまつたせいか昔は丁寧だつた言葉遣いや振る舞いがいつの間にか荒くなつたことに最近気が付き始めた。

もし仮に全てのサーヴァントを倒して亞種聖杯戦争を根絶したとしても以前のようにみんなと笑つて過ごす、というのは出来そうにもない。

「よし、こんなもんか……」

荷物を載せ終わり、俺はライドベンダーに跨り夜道を駆け出した。

ふと、後ろを振り返ると小屋の住民が扉を開けたまま立っている、暗闇だつたせいか、彼らはどのような顔をしていたかは全く分からなかつた。

トウリファスから少し離れた近隣の都市シギショアラに映司は向かっていた。

カンドロイドからの情報によるとアーチャーとそのマスターが本拠地である城塞を離れそこに向かっていた。

『地の利がある黒側のサーヴァントが持ち場を離れて動いているということはきっと何かあるはず、』 そうふんだ映司は威力偵察を行うことにした。

シギショアラに入ると既に2つの戦闘音がしていた。

恐らくサーヴァントと魔術師が混戦状態に陥っていると判断した映司はまず明らかに音が大きいサーヴァント同士の戦いに乱入ことを決断した。

効率を重視するならば魔術師を先に無力化することが望ましいがここは人が住む都市であるため戦闘による被害が尋常ではないサーヴァントをまず止めることを映司は優先していた。

ベルトにメダルを装填し変身を完了した映司はギアを全開にして現場へ突入する。

右腕を負傷した青年と鎧を着た剣士を認めた映司は、まず明らかに強力そうな剣士の方に負傷を負わせるべくライドベンダーのスピードをさらに上げ、そのまま体当たりをくりだした。

しかし、一瞬の刹那に怪物の姿を確認した剣士は間一髪で身を躱す。

躱されたことに怪物は内心で舌打ちはしつつも急ブレーキを発動しタイヤを滑らせながらも冷静にバイクを停車させた。

座席から降りつつ、荷台に掛かっていた愛用の剣を取り出すとゆっくりとした足取りで2騎の英靈に向かっていく。

「どうやら……」までのようですね……

負傷したん青年がそう呟くと身体を跳躍させ、建物の上へと距離を取った。

「逃げるか、アーチャー!?」

剣士は怒りを隠さず咆哮するが、青年は顔色一つ変えなかつた。

「ええ、このままではこちらが敗北します。なので貴方にはこの怪物を相手にしていただきます。」

(クソッ、やられた!)

怪物は青年の意図を察知すると下半身の力を解放して追跡を試みようとするが、一瞬の内に隠れ身で路地裏に逃げられてしまった。

後に残つたのは激昂する剣士と怪物、これから何が起こるかは想像に難くなかった。

(おい・・・・・マスター)

鎧を着た剣士は怪物の姿を確認すると同時に己のマスターに念話を放つ。

(何だセイバー？俺はもう大丈夫だ。そろそろ戻ってきていいぞ)

(悪いマスター、こつちはまだ続きそうだ)

そのセリフに剣士のマスターは疑問を呈す

(何？サーヴァントとマスターは既に撤退してるぞ)

(お前の言っていた怪物が来た)

その言葉に剣士のマスターは少し考えて発言した。

(分かつた、一応そいつはターゲットだから俺は止めたりはしない。だが、恐らくそいつには英靈を殺す程の何かがある。それだけは留意しろ)

己のサーヴァントを止めるのは不可能と判断したマスターはせめてものアドバイスを送った。

(ハツ、テメエのサーヴァントを何だと思つてやる。俺は最強の英靈だ、何が来たとしても正面から叩き潰してやる)

威勢のいい言葉を最後に剣士はマスターとの念話を切る。

「色々と言いたいことはあるが・・・今の俺にそんな慈悲はない、英靈殺しだか怪物だか知らねえがテメエが俺に叶う道理は万に一つもねえ」

「あ、そう」

剣士の挑発に対しても怪物はまるで無関心かのように応える。

怪物は幾度もそういう台詞を吐くサーヴァントと対峙したきたせいか相手にするのも億劫であつたため何も突つ込まないことを決めていた。

だが、その態度が剣士の怒りの炎に油を注ぐこととなる。

剣士のこめかみから何かが切れる音が響くと、身体に纏わせていた怒気がさらに圧力を増した。

「・・・・もういい、殺す。」

問答を打ち切ったは剣士は怪物に目掛けて剣を振りかぶった。

剣士と怪物と力の謎

(・・・・・ツ！はやつ！)

セイバーの放った一撃を怪物はなんとかバックステップで躱す。剣で受けることも出来たが自分自身の長年の経験による直感は“悪手”と判断していた。

最初の一撃を躱した後、剣士から漏れ出る魔力を見て怪物は己の直感が間違つていなかつたことを確信した。

（あの漏れ出る尋常じやないほどの魔力量、ジェット噴射のような加速・・・間違いない、あれは魔力放出だ）

魔力放出とは武器・自身の肉体に魔力を帶びさせ、瞬間的に放出することによつて能力を向上するスキルであり、長所としては絶大な能力向上を得られ、短所としては通常の魔力消費とは比べものにならないくらいの負担をマスターが負うことなどがあげられる。

いずれにせよそう何発も撃てるモノではないため回避に徹していればその内マスターの魔力が切れ必然的に撤退を強いらることとなる。

最も・・・魔力放出のスキルは白兵戦に非常に長けた高位の英靈しか持していないため、一流のサーヴァントを相手取る技量を最低限持ち合わせてなければたちまち押し切られてしまうだろう。

「オラッ、そこだあ！」

剣士の放った蹴りが腹部に命中し、怪物は遙か後方に吹き飛ばされ、小屋に激突し瓦礫の山を作り出した。

（ぐ・・・うう、つ、強い。このセイバーはおそらく黒のセイバーと全く引けを取らないほどの格を持つた高名なサーヴァントだな・・・。）
瓦礫の山から何とか這い出した怪物はある決断をした。

（しようがない、あの力をこんな序盤から使いたくはなかつたが・・・。）
ここでセイバーを倒しておけば赤の陣営はきっと総攻撃を中止せざる終えないだろう・・・。）

たつた数舜の攻防で怪物は目の前の剣士が己より遙かに強いことを確信し、出し惜しみしないことを決めた。

無論怪物には他の形態で戦う選択肢もあつたが、ここまで高位かつ一流のセイバーを相手にするとなると、もはや隙がなかなか存在しないため奥の手を使うしか勝利への道はない。

幸いにも両者はシギショアラの無人地帯に入つていたため怪物は奥の手を使つてもそこまで酷い被害にはならないと確信していた。自信の胸に手を当て、中に潜む危険な力へ向かつて怪物は語り掛けるように言葉を紡ぎ始めた。

「頼む・・・・俺に力を・・・・」

「アア? 何ブツブツ言つてやが——ツツ!!」

怪物に対し圧倒的に優位を誇つていた剣士は、怪物が言葉を発し始めた瞬間、己の直感が今までにないほどの警笛を鳴らし始めたため、思わず飛びのいた。

(・・・・・?なぜ今距離を取つた?)

怪物は一瞬のこと間に情報の処理が追いつかず、力の引き出しを一旦中止する。

「クソッ!!」

その一瞬の隙に剣士は最大級の悪態をつきながら身を翻し夜の闇へと消える。周辺の魔力濃度が元に戻り戦場だつた無人地帯は元の廃墟に戻つていった。

監視用の使い魔が消えたことを確認し、怪物は装置を水平に戻し元の映司へと姿を戻す。

「なるほど、アイツは直感が未来予知のスキルを持つてゐるな・・・一見粗暴そうに見えて油断ならない奴だ」

セイバーを逃してしまつたとはいえ、シギショアラがあまり被害を出さずに済んだことを映司はプラスと考え、再びトウリファスへと戻るためライドベンダーの元へ向かつて歩き出した。

突如怪物から漏れ出た原始的な力に対する恐れとそれに屈した己自身に对する怒りを胸に抱えたセイバーは重い足取りでマスターの

元へと向かつていていた。

歩き出して十分、セイバーのマスターは年代物の建築物に気の抜けた様子でもたれかかつていた。

「アーチャーと怪物は撤退したか」

セイバーのマスターは決して彼女が怪物を前に逃げたとは言わなかつた。

状況的にはセイバーが撤退したのは事実に近いが、だからといって命を懸けて戦った己のサーヴァントに対して心無いことを言うつもりはないようだ。

「マスター……アイツはなんだ……？」

セイバーは思わずマスターに当てつけ気味に問いかける。

それも当然だ、彼女はそこらへんの並の英靈ではなく、世界に広く名を知られた大英雄の1人。

そんな自分がみんなワケの分からぬものを相手に撤退を強いるられるなどあつてはならなかつた。

だが、もしあの場で己の直感に従わなかつたら真の力を解放した怪物を前に成す術なくやられるという結果になつてしまふのかセイバー

なぜ成す術なくやられるという結果になつてしまふのかセイバーは納得いかなかつたものの、己の直感を裏切るという愚行は行わなかつた。

「そうだな、俺の予想としてはサーヴァントに対抗できる礼装を身に着けた魔術師か魔術使いだと思つてゐるが……お前はどうなんだセイバー？ アイツと戦つてみたんなら俺よりも詳細な推測ができるはずだぜ」

マスターの問いに答えるため一度怒りを飲み込んだセイバーは冷静に先ほどの状況を振り返る。

正直、怪物が力を解放しようとする前はこちらが圧倒的に優位であり、それこそ並の英靈でさえも勝つことは可能だろう。

だが、あの力だけは尋常ではなかつた。

ブラックホールのような力の奔流を思わせたかのようにおもえれば、巨大な虚のよう暗い気配を醸し出していた。

その力の印象からセイバーは英靈が本来戦うべき強大な敵の気配を感じ取った。

「アイツは……いや、やっぱり分かんねえ」

「そうか……まあ、戦いはまだ序盤に過ぎん。怪物も黒のアーチャーも仕留める機会もまたあるだろうさ。という訳でトウリファスに帰還するぞセイバー」

「あいよ。……で、どうやつて帰るんだ？行きに使ったバスはもう出てないだろ？」

「そりゃお前——借りるんだよ」

そういうとセイバーのマスターは大通りに停車させていた乗用車の窓ガラスを叩き割り、ドアのロックを解除した。

もちろん、セイバーのマスターはこの車を返却するつもりは毛頭ない。

「ほら乗れ」

「……警察に捕まつて聖杯大戦から脱落という結末は避けてくれよ、マスター」

セイバー呆れ混じりに嘆息した。